

## 百武裕司氏を悼む



アラスカ州フェアバンクス市内でのスナップ  
(2001年2月)

4月10日夜10時過ぎ、突然の奥様からの電話に耳を疑いました。奥様の「嘘じゃないのよ。本当なの。」の響きに返す言葉もなく、数日前まで元氣な声を聞いていただけに、これが悪い夢であることを祈りました。

私が百武さんと初めて知り合ったのは、1995年12月の新彗星C/1995 Y1の発見が切っ掛けでした。なんとその翌月には、その後歴史的な大彗星となったC/1996 B2を連続して発見。こんな近くに素晴らしいコメットハンターがおられたことに驚きを感じ、それからは頻繁にご自宅を訪問しては、氏の深い知識と情熱に感銘を頂いておりました。緑茶と煙草が大好き、中島みゆきを好んで聴く方でした。

百武さんは観測ということに、一貫した信念を持った方でした。それまでの彗星搜索の常識は、彗星が明るく観測される確率の高い、明け方か夕方方の低空を探すというものでしたが、氏はむしろ太陽からの離角の大きい領域を探すという手法を取っていました。「明るくなる前の彗星は誰も探さないはず、自分なら眼視で12等の彗星まで見つけられる」当時としては常識はずれの搜索方法は、まもなく2つの新彗星の発見によりその正しさが証

故 百武裕司 (ひゃくたけゆうじ) 氏

1950年生まれ。

1995年12月にC/1995 Y1を、ついで1996年1月にC/1996 B2を発見し、同年3月、日本天文学会の天体発見賞を受賞。特に、C/1996 B2は同年3月に地球に大接近し、多くの人々を魅了した「百武彗星」として知られる。

1996年秋より鹿児島県始良町立天文台「スターランド・AIRA」館長を務める。

2002年4月10日動脈瘤破裂のため急逝。享年51歳。

明されます。こんな強烈なこだわりの一方で、世紀の大彗星となり世界的な大ブームを巻き起こした、いわゆる「百武彗星」については、「発見したのは私だが、私が大きくしたわけではない」と語り、矜持の姿勢に徹しておられました。今年は、年初より日本のアマチュアによる新天体の発見が相次いでおりますが、「彼らの活躍が自分に勇気と元氣を与えてくれる」と喜んでおられ、死の直前まで搜索に情熱を注いでおられました。搜索活動の傍ら、天文文化の普及のためにも力を注がれ、数々の講演等を通じて啓蒙活動も継続されてきました。

また、無類の愛妻家でもありました。奥様の昭子さんは、晴れた夜にはいなくなる夫に対して、「今出来ることをやらなきゃね。あなたはやることがあるといいね」と語り、夫は、はにかみながらも「妻の理解があつてのこと、いつも感謝している」と周囲に話していました。告別式にて、いつもは氣丈な奥様の喪服姿は、立派に成長された二人のご子息に扶まれて一層小さく見え、今にも崩れ落ちそうな様が脳裏に焼きついています。

日本、いや、世界中のアマチュアにこれほど夢と感動を与えて頂いた方を私は他に知りません。まだまだ教えて欲しいことがあったのに、ほんとうにかえすがえすも残念で、未だに信じる事が出来ません。今は、ただただ、百武さんのご冥福をお祈りしております。

2002年4月12日

早水 勉 (せんだい宇宙館副館長)